

はじめに

この稿は、木場の「亀山雲平顕彰会」代表長野哲氏が 2001 年に白浜公民館において「播磨の聖人 亀山雲平を発掘する」と題して行った講演の中の「灘まつり」についてお話された内容を抜粋し文章にしたものである。

この講演は白浜公民館主催で、2001 年 4 月から 2002 年 3 月まで、計 10 回にわたって行われた。なお、話の内容で一部集約したり、細かい部分は割愛させていただいた。また、人名等の固有名詞については聴き取りのため、呼び名、文字は正確ではないものがある。

解説 山田 正夫

「灘まつりについて」

2001 年 11 月 23 日

「播磨の聖人 亀山雲平を発掘する」十回シリーズ 第 3 講

冒頭の亀山雲平の祭りに関する漢詩二編の説明は省略する。

この絵は、幕末、江戸時代末期の絵ですが、この巻物は木場の塩田主の三木伊左衛門が当時日本一と云われた京都の平安仁清という画家に書かせたもので、長い長い巻物です。現在は山秀青果の社長が持っておられるものを私が写真に撮ったものです。

この絵を見ると、現在の木場の「お迎え提灯」は 20 ですが、当時は 50 ありました。「お迎え提灯」は、神功皇后が三韓征伐から帰ってきたときに妻鹿の沖でゴイナ落としやったときのものというのはウソで、そんな昔にこんな提灯はありません。この提灯は、木場の人自分たちの家族が、船で交易に出て塩を売りに行ったり、焚き物を積んで戻ってきた時に、波止へ迎えにいった時のお迎え提灯なのです。当時の木場の港には大小 250 隻くらいの船があつて、九州や朝鮮や、堺、大阪、紀州へ塩を運んだ船ですから、「〇〇丸」と言われた大きな船でした。

この絵にあるように、昔はほとんど文盲で字が読めなかったとみえて、提灯には〇や△や×と言った記号を書いて、自分の家族に分かるようにしたらしい。

その頃は、江戸幕府によって千石船などの大きな船の建造を禁止されていたのですが、幕末になって、ペリーが黒船で来航したり、ロシアなどの外国から大きな艦船がきたりして、にわかには日本の周りが騒がしくなってきたために、千石船などの 100 トン級の大型船を造ってもよろしいということになったそうです。

その千石船を造ったのが、宇佐崎の河野さんの先祖、屋号を「伊豫屋」というのですが、「三島丸」という千石船を造りました。もう一つは「蓬莱丸」といまして白浜の組合で造ったそうです。

三島丸の船頭をしていたという人が木場の今津九郎三郎梅吉という人で、私が子供の頃に九〇歳を超えて「めっきゃん」と呼ばれていました。その人から、「大きな立派な船やった」と聴かされていまして、今でも木場に船の舳（へさき）に付けている「三島丸」と書いた大きな木の板が 2 枚残っています。

ここを出港すると一日半で大阪に着きますので、その当時日本の文化の中心は天皇のおられた京都でしたから、いち早くその文化が木場の地に上がってきたわけです。それと、昔から塩田と共に栄えてきたということと相俟って、木場が一番に「ヤッサ」を作ったということです。

何故、木場が一番に宮入するかといいますと、木場が最初にヤッサを作ったからで、そのことが、宝暦8年（1758年）に交わされた「八幡宮御神事御規式定」という巻物があってその中に書いてあります。この定書は、お互いに決りを守って祭りをしようということで七村に各一通ずつ配布されましたが、現存するのは木場にある一つだけです。

それでは何故、木場に最初にヤッサが出来たかというのは、姫路藩の家老であった河合寸翁（本名・道臣 明和4年～天保13年、1767～1841年）の時代に戻ります。

その頃天候不順で飢饉が頻発していたようで、全国各地に百姓一揆が起こっていたようですが、姫路藩でも「寛延一揆」という大きな規模の郷訴（ごうそ）が起こり、姫路で治めきれずに大阪から城代家老に来てもらって治めたという史実があります。

その時に、酒井宇多守忠道が姫路にきて、家老にしたのが河合寸翁でした。当時の姫路藩の借金が73万両、現在の価値にして200～300億円あったそうですが、酒井の殿さんが「全権を渡すから、わしの代わりに藩の財政を立て直してくれ」と頼んだそうです。その時寸翁は42歳（文化5年、1808年）。それから26年かけて全部借金を払い終え、更に2万両ほどの貯金まで作って、69歳（天保6年、1835年）で引退、75歳（天保12年、1841年）で亡くなったそうです。それから27年後に明治維新が起こりました。

そんな姫路藩の中で、街道より北の方では不作続きで一揆が起こる状態であったのですが、反対に南の灘地区では、「灘王国」と言われるくらい経済的に裕福で、松原は鍛冶屋あり、木場、八家は塩田あり。海運あり、漁業あり、百姓はよく獲れるし、東山は瓦や東山焼ありで、経済的にも豊かで力がある地区でした。松原の鍛冶屋でも、炭本総右衛門が始めた時は灘で1軒だけだったのが、次の年には3軒になり、何十年かの間に鍛冶屋だらけになったと云われています。

だからこの地区は金持ちばかりで月々給料が入り、藩にとっては余計な智慧が一杯入ってくるが、他所（国道より北）は二毛作で米と麦が一年に二回しか金が入って来ないのでその心配は無い。

その格差のある状態で、一揆の影響を受けて暴動や反乱が起こったらまずいと、河合寸翁は考えて、どうすればこの藩がうまく治まっていくかを思案していた時にアドバイスを求めたのが淡路の高田屋嘉兵衛（明和6年～文政10年、1769～1827年）でした。

高田屋嘉兵衛は当時回船業で財をなした人で、日本国中はおろか、遠く択捉島や樺太まで交易をしていました。その高田屋嘉兵衛が各地で商売をしてきた経験から、「祭政一致」といって、祀りごとを盛大にすることで富を分散することが、一番効果があるということ寸翁に進言しました。

寸翁、「灘地区の力を抑える有効な手立てはないか」

嘉兵衛、「現在やっている『まつり』をもっと盛大に、派手にしてはいかがでしょうか」

寸翁、「どういう風にすればいいのか」。

嘉兵衛、「大和国の河内にいい手本があります。そこの祭りのやり方を取り入れたらよいと思います。」

寸翁、「その『ヤッサ』とやらをどうすればいい」

嘉兵衛、「私の方から河内の大工に頼んであげましょう。」

そして最初に五台作って、陸路をゴロゴロ引っ張って持ってきてくれました。先に3台を木場、八家、東山に、後の2台は少し遅れて盆までに、松原、妻鹿に到着しました。その費用は1台1000両で、5台分の5000両は高田屋嘉兵衛が出してくれ、後の2台分は河内の大工が出してくれたそうです。嘉兵衛は当時交易で商売をしていましたから、姫路藩にも世話になっているということで5000両は寄付してくれたそうです。

これで、7台の「ヤッサ」がそろって、現在の灘祭りの原型ができました。その時、喜び勇んでみんなで「ヤッサ」を練りまわったという記録があって、それが文化5年（1808年）で、今から200年ほど前のことです。

ただ、そのころの「ヤッサ」は今のように豪華な化粧屋台ではなく、「神輿太鼓」と言われるもので、金物も無いし伊達縄や布団もない、神輿に太鼓をのせてたたいていました。

今の「ヤッサ」になったのは明治以降で、亀山雲平さんがここの宮司として来た以降のことですから、その変遷を一番良く見ていたはずなのですが、そのことに関しての記録が一切残っていません。雲平さんは儒学者でしたから、書くことに関しては長けていた人で色々と細かいことを記録に残していますが、残念ながら、祭全般にわたって記録が少ない。詩（漢詩）でも何万編という詩を書いています。が、「まつり」に関しては、先に紹介しました2編だけです。

—中略—

これは絵馬堂にある絵馬です。木場の庄屋の神沢センゾウという人が30両で作って絵馬堂に上げた物で、享保時代の祭りの状況を描いたものです。享保という時代は大岡越前や紀伊国屋文左衛門が活躍した頃で、江戸時代でも一番栄えていた平和な時です。

祭りの形態が、流鏝馬に始まり紅鶴やレン？があつて男が三味線を弾いたり鼓（つづみ）を打ったりした。ヤッサが15もあり、テンテコイチあり、ダンジリがあり、縄を張ってその中で三味線や鐘や太鼓を打って、今でいうチンドン屋みたいなものまであった。これは今でも魚吹八幡宮では残っています。また相撲もありましたが、いつも喧嘩が絶えなかったそうです。

平和な時代だったものですから、祭りの規模が大きくなり、長い大きな行列でどんどん増えていって治まりが付かなくなった。そこで、享保13年（1728年）に「古式に則って祭りをしよう」という決め事を決めたそうです。

しかし、その後 30 年の間に、ますます祭りが盛大になり、神輿やヤッサを合わしたり、喧嘩やもめ事が増えたりして、雲平さんの言うように、神事でありながら、厄災を招くような祭りになっていきました。

そのため、再度、宝暦 8 年 (1758 年) に規則定書きを作って、七村に通ずつ持って皆で決め事を守ってやろうということにしました。それが先ほど話をした「八幡宮御神事御規式定」という巻物です。その中に「神輿をあわせてメンだ (壊した) 場合はメンだ村が『マドえ』 (弁償せよ) と描いてあります。

播磨地域の祭りというのは、当時はどこもこういう長い行列を作って、練り物やダシ物を一杯やっていたようですが、明治になって以降、この地区はヤッサだけにしぼってやろうということになり、今のような豪華なヤッサになりました。特にこの灘地区は金を持っていたので、明治以降でも出来るだけ金を使わせるように、大きくて豪華なヤッサを作らせました。今のヤッサの形は「宮型」というのですが、当時の木場のヤッサの金物は全部「本物の金」だったということです。ただし、国道より北の地区は農業が主体でしたから、そんなに大きくなくて軽い布団ヤッサでよろしいということだったようです。

灘地区を豊かにし、祭りを盛大にした一番の功労者は、何と言っても、明治初期に松原八幡宮に赴任してきた亀山雲平さんです。藩の重役だった人が、普通ならこんな片田舎に来る人ではないのに、何故この地で後半生を過そうとしたかというのは、ここの総代の人たちが金持ちで、立派な人を招請する力があったからです。

河合寸翁が奥山に仁寿山校を作ったのも、やはりここの総代の人たちがこの地に招請したもので、わざわざ運河まで作って来てもらったそうです。この地区の塩田主から多額の寄付を仁寿山校にしたという記録も残っています。

こういうように、村の指導者たちが金持ちで学問、文化に傾注してきたから実現できたことで、そのお陰でこの地は繁栄し、発展してきたわけです。

松原や妻鹿の南の新田を何十町も開発出来たのも、各村の指導者の人たちが雲平さんの門人で学問を受けたことで出来たことで、松原の炭本総右衛門 (注 1)、宇佐崎の置塩万九郎、大森新田を開発した大森センゾウなどすべて雲平さんの門人です。そういった人達も新田開発には莫大な資金が必要で、みんな途中で資金が足りなくなってしまったのを、藩校の好古堂の教授をしていた頃の門人である、加東郡の河井宗兵衛、尾上宗兵衛 (?)、近藤ブンダイ (?) といった藩の金貸しから、雲平さんが資金を調達したそうです。

※ 松原の炭本総右衛門については文末の資料参照

※ 子弟教育の大切さは、江戸末期の越後長岡藩の「米百俵」の逸話で知られるように、儒学 (朱子学) の教えから来ている。

雲平さんはこういうことをいっています。

読書を勧める節

「家を富ますは、良田を買うことをもちいず・・・」

わが家を富ませようとする時は、いいもの (田や畑) を買うな・・・と続くのですが、難しいので、要約しますと、

「家を繁栄させようと思えば勉強しなさい。私も一所懸命に教える。ただし、要らん勉強はするな。自分の生活のためになる勉強をしなさい」。これが、今の時代の知識だけの教育ではなく、人が生きていく根本の勉強、つまり「実学」です。雲平さんは「観海講堂」という私塾をこの地に創設して子弟を教えただけでなく、身をもってこれを実践して見せてこの灘地区の現在の繁栄のもとを作った人と云えます。

炭本総右衛門

白浜村初代村長炭本総右衛門は安政6年（1859年）5月松原に生まれる。松原は松原釘の産地で当時家内工業として釘造りが盛んで、炭本家は代々その問屋であった。

松原釘は姫路城の築城に必要な和釘（角釘）を作ったのに始まり、近世から近代にかけての長期にわたる松原の地場産業であった。

明治22年（1889年）初代白浜村長となり、18年間勤めた。この間、新開地田の決壊が5回、旱魃の年が2回あったが、総右衛門は災害地の免訴、地租補助貸与の出願、種穀料、小屋掛料救助金の出願に東奔西走した。加えて丸釘の輸入にとともに松原釘は販路を失い村民の生活は貧しくなっていた。

救助金は一時的な救済にしかないと考えた総右衛門は、産業の振興と教育の必要性から私財を投じて明治20年（1887年）粟生小学校（白浜小学校）の校舎を新築し子弟の教育を推奨し村民に新たな職業を与え、明治23年（1890年）に万代新田を開いて塩業を始めるなど殖産の道を開くことに力を注いだ。

この間、村に私財を投じた住本家は傾き始めそのことを心配した総右衛門の友人は「家をどうするのか」と聞いたところ総右衛門は平然と「私の家の倒れるのは小事であるが、村の倒れるのは大事である。見過ごすことは出来ぬ」といった。

明治31年（1898年）4月白浜に最初の燐寸会社「中央燐寸」を設立した。これが戦後の一時期全国生産の66%の生産高を誇った白浜マッチ産業の創始となった。

引用資料

「灘地区の地域資源」 平成17年12月 灘地区地域夢プラン実行委員会発行